

～洛西からの一読～

今回のテーマは「ふしぎ」

子どもの頃、摩訶不思議なことが起こったらいいのにと時々思うことがあった。しかし、実際に飼っている犬がソファーに座って新聞を読んでも驚いてしまいます。起こらないとわかっているから想像を楽しむ事ができたのかもしれない。子ども時代の想像力を膨らませてみませんか。

不思議の国のアリス



不思議の国のアリス

ルイス・キャロル著 脇 明子 訳 岩波書店

読書をする姉のそばで退屈な時間を過ごしていたアリスは、懐中時計を見ながらブツブツ言って走り去るウサギに出会います。何かしらとウサギの後を追いかけたアリスはウサギの穴に落ちこちて不思議な世界へとやってきます。そこで起こることはどれも奇妙で不思議なことばかり。好奇心たっぷりのアリスが出会う不思議な世界を一緒に楽しんでみるのはいかががでしょう。ただし、私はいつもこの作品を途中で投げ出していました。不思議な世界について行けず、何度も読んでみようとしたのですがだめでした。今回ようやく読み切ることができ、この不思議さをそのまま受け止めることができました。イギリスの昔々の教訓的な詩やエピソードを背景に子どもを楽しませるためのお話になっています。

だれも知らない小さな国



だれも知らない小さな国(コロボックル物語①)

佐藤さとる・作 村上勉・絵 講談社

僕が9歳だった夏からこの物語は始まります。昔々にその小山に住んでいたといわれる「小さな人」(こぼしさま)に出会ったのです。警戒心が強く誰にも知られないように密かに暮らしていた“こぼしさま”との最初の出会いは、小さな女の子が川に赤い運動靴を片方流してしまい、その靴を拾った僕は、靴の中に「小さな人」が手をふっているのが見えたのです。「小さな人」は信頼できると思った人にしか姿を見せないはずなのに……。僕は「小さな人」に認められたのかな？しかし、まもなく僕は小山から引っ越ししてしまいます。おとなになって小山にもどってくると、“セイタカサン”と呼ばれ「小さな人」と再会します。ずっと気になっていた「小さな人」と出会い、新たな関係がどのように変わっていくか興味を持って読んでみてください。“セイタカサン”や“おちび先生”が「小さな人」を温かく見守っている様子が心にほっこりとさせるものを感じます。その後この話は「豆つぶほどの小さな犬」「星からおちた小さな人」「ふしぎな目をした男の子」「小さな国のつづきの話」と続きます。